

苫東環境コモンズ

林と住民つなぐ取り組み

安平町遠浅の 大島山林 採鳥会や講演会開く

苫小牧市内のNPO法人苫東環境コモンズは、同法人が管理する安平町遠浅の苫東所有地である大島山林の環境整備と、地域の人々と林を結び付ける取り組みを展開している。生活のすぐ隣にある林を住民にとって親しみのある「共有財産(コモンズ)」として距離を近づけながら、美しい林造りを進める。

同法人は2010年に設立し、苫東と協定を締結し、大島山林の管理を手掛けている。これまで市内静川などで美しい林造りに取り組み、大島山林も10年に整備をスタート。長年放置され、うっそうとしていた山林70畝内のナラやシラカバなどの倒木を冬季に回収。春から夏にかけて自分たちでまき割りをし、会員に振り分ける有効活用を進

め、これまでに10畝程度の作業を終えたという。

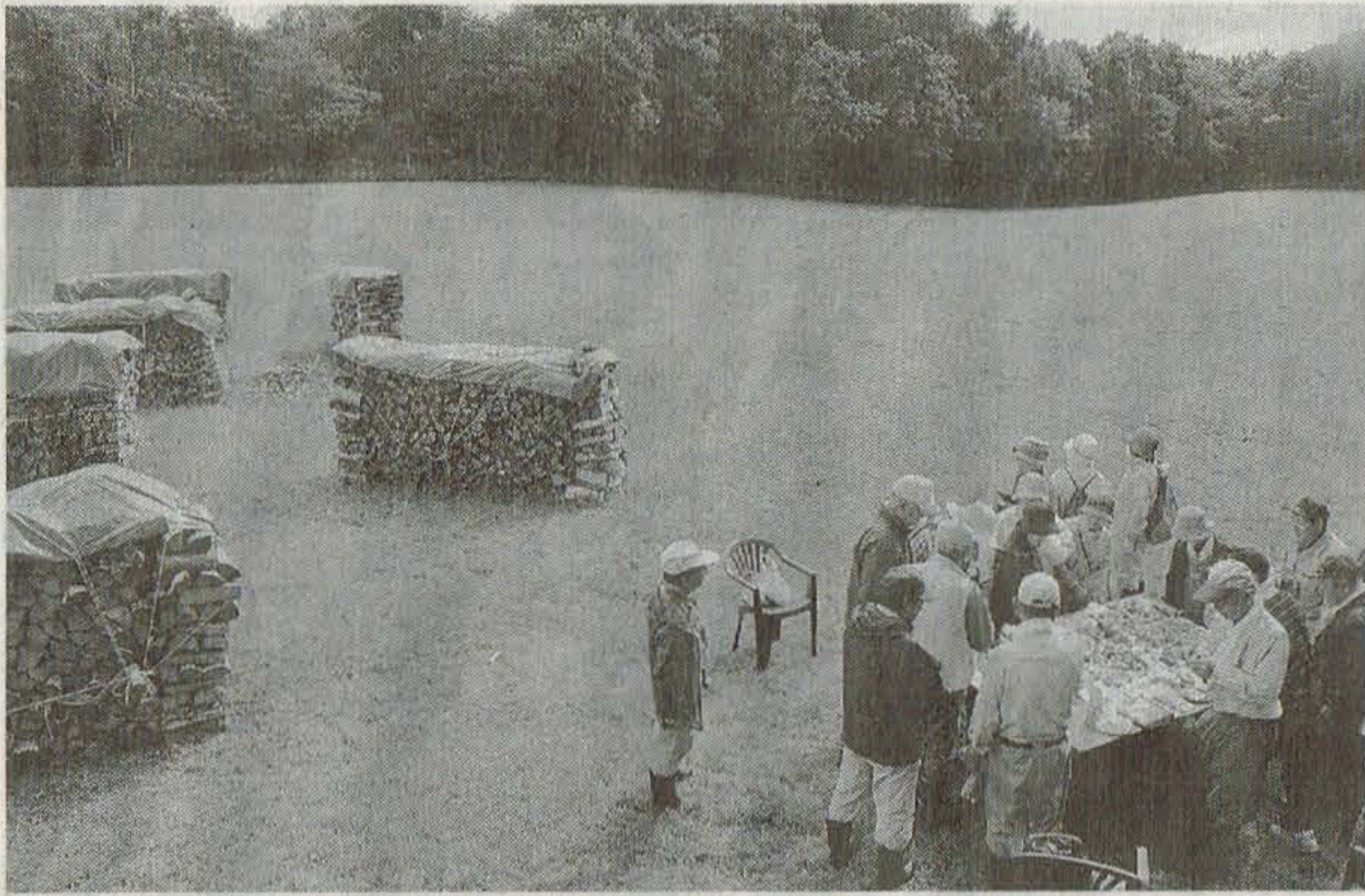
冬期間の倒木回収では、地面を走行することによって徐々に林道ができ、ササを刈るだけでできた散策路が、フットパスコースとして親しまれるように。草刈事務局長は「今は、この林は知る人ぞ知るフットパスコースになっています」と語る。大島山林近隣の遠浅自治会では、山林

内のあいりす公園の整備を15年間ほど手掛けており、現在の整備委員の和田幸徳さん(67)は「以前はうっそうとして暗かったが、今、林はすこく明るくなり、道も整備されて人が歩ける環境になった。散歩をする人も結構いるんですよ」と語る。

同法人が今年度新たな取り組みとして力を注いでいるのが人々と林を近づける活動だ。遠浅自治会の協力を得て4月に野鳥の鳴き声を楽しむ採鳥会、7月には同法人理事で精神科医の瀧澤紫織さんを招いた「緑に親しんで健康長寿」を開いた。第3弾として9月17日に同法人理事で胆振きのこ菌友会の小山滋会長を

講師に、林の中でキノコを採ってきて、毒キノコか食べられるキノコかを勉強する判別会も開いた。参加者は25人以上り、同自治会の須貝政敏会長(67)は「さまざまな知識のある方たちからいろいろなことを学び、とてもありがたいこと。この林は私も子供の頃、よく遊び、昔から地域に住む人たちにとっては大事な林。こうした自然が身近にあるということを大事にしていきたい」と語る。

草刈さんは「身近な場に山林があるということが、『里山』を散策するという喜びや心身のリラックスにつながったり、認知症予防になるという話もある。日常的に林と身近に付き合うという生活の大切さに目を向けながら、美しい林を造っていききたい」と話している。



大島山林で採ったキノコの判別会をする住民とコモンズのメンバー